

聴覚障害児の発話に伴う身振りについての一考察

川 崎 億 子

はじめに

これまで、聞こえる乳幼児の身振りと言声言語の発達に関する研究では、乳児が月齢10ヶ月頃から発声、視線、指さし等の前言語的手段によるコミュニケーションを開始し、次第に複数の手段を複合的に使用ようになる(斉藤・武井・荻野・大浜・辰野,1981;山田・中西,1983;秦野,1983,1984)ことや、身振りの使用と言声言語発達には相関があり(Acredolo & Goodwyn,1988;Bates, Thal, Whitesell, Fenson, & Oakes, 1989), 身振りによるコミュニケーションが音声言語の表出よりわずかに先行するが(Volterra, 1981), その後、身振りと言声言語は二語発話が優位になる頃までは併用され(Goldin-Meadow & Morford, 1985; Capirci, Iverson, Pizzuto, & Volterra, 1996; 高井・高井,1996), 二語以上の発話が優位になると身振りは消失する(山田・中西,1983;村瀬,1993)ことが示されている。

また、一語発話から二語発話への移行期の身振りの機能を検討した研究では(Goldin-Meadow & Morford, 1985; Capirci, Iverson, Pizzuto, & Volterra,1996)幼児が身振りと言声言語とを組み合わせ使用しており、その組み合わせ方には3つのタイプがあることが示されている。

一方、聴覚障害児のコミュニケーションや音声言語発達に関する研究においては、身振りは音声言語の代替手段と考えられ、音声言語の発達が停滞していると身振りによるコミュニケーションが持続し、身振りの使用は音声言語発達を阻害するものと捉えられてきた。

例えば、Goldin-Meadow & Morford (1985)は、聴者の親をもち、聴覚口話法による言語指導を受け、手話モデルのない言語環境で養育されている聴覚障害児10名の自宅における母子コミュニケーションを観察し、音声言語はほとんど観察されなかったが、聞こえる幼児の発話と同様の語彙や統語構造を有し、言語的システムとして機能する身振りシステムを、幼児が独自に発達させていることを明らかにした。

こうした音声言語発達の停滞を補う身振り使用という捉え方がある一方で、身振りは音声言語と併用され、聴

覚障害児の不明瞭な発音による音声言語の意味を補強するとした研究もある(de Villiers,J., Bibeau,L., Ramos,E., & Gatty,J.,1993)。さらに、Robinsshaw(1996)は、5名の聴覚障害児のコミュニケーションの発達を観察し、統制群の聞こえる幼児5名と比較した結果、どちらの幼児も二語発話に先行して身振りと言声言語を併用しており、身振りの使用は二語発話への移行を援助すると述べている。

本研究では、聴覚障害児のコミュニケーション場面における身振りと言声言語使用のあり方を分析し、身振りと言声言語の機能的な役割について検討することを目的とする。

方 法

1) 対象児

聴覚口話法による教育を行っている公立聾学校幼稚部に在籍し、重度の聴覚障害がある幼児1名。両耳に補聴器を装着している。

2) 観察方法

幼稚部における教師と幼児、幼児同士のコミュニケーション場面を毎月1回観察し、コミュニケーション場面の内、約60分間を録画する。

3) 観察期間

対象児が幼稚部3歳児クラスに入学した年の6月から5歳児クラス12月までの2年6ヶ月間。

4) 分析資料の作成

録画したビデオテープの内容を全て書記化し、以下の観点に従って分析資料を作成する。

- ① 対象児が相手へ呼びかけたり、相手を見て表出するなど、文脈から相手に向けられた行為であることが分かるものをコミュニケーションとして扱う。話者の交代をコミュニケーションの区切りとする。
- ② 対象児の音声による発話(1)は、聞き取れた通りに表記する。発音や録音が不明瞭で聞き取れなかった部分は、(…)と表記する。
- ③ コミュニケーションの中で、手を中心とする身体部分の動きによって、相手に何かを表示しているものを

身振りとする。

- ④ 身振りの種類は、以下に示す喜多(2002)の定義による。

エンブレム：身振りの形と意味が社会的慣習として定まっているもの。

表象的身振り

- a. 直示的身振り：身体の一部をある方向に向ける、またはある場所を触ることによって、ある方向、場所、事物を指し示す。
- b. 描写的身振り：身体の動きと指示対象とのあいだの類似性に基づいて表現する。

ビート：典型的には上下に刻むように双方向的に小さく動くもので、同期している発話の内容によって身振りの形が変わることがないもの。

5) 分析方法

対象児のコミュニケーションの中から、音声言語と身振りによる発話の一部を事例として抜き出し、音声言語と身振りの使用状況を検討する。

6) 表記方法

- ① 教師による発話を「T」、対象児による発話を「C」と表記する。
- ② 発話の内容は、上段に音声または音声言語による発話を「 」内に表記する。下段に身振りを表記する。また、上段の表記の内、身振りを伴う部分に下線を付す。
- ③ 身振りは[]内に身振りの種類を記し、()内に手の形、向き、動きの方向等を表記する。
- ④ 音声言語による発話の表記は、文節を1単位とし、一文字分空ける。身振りは、休止を挟まずに表されたひとまとまりの動きを1単位とし、次の身振りとの間を一文字分空ける。

なお、観察を実施する際に、当該聾学校へ研究計画書を提出し、クラスへの参与観察および守秘義務の遵守に基づく研究結果公表の承諾をいただいている。

結果と考察

事例1：観察時期は3歳クラスの6月。お絵かき用の紙に絵を描き、それを教師に頼んで教室前面の掲示板に貼ってもらう場面。

T：「これは 何かな」

[直示的](対象児の絵を指さす)

C：「あっ」

T：「あっ なに？」

C：「あんぱー あっ」

[描写的](両手拳を自分の頬に付ける)

[直示的](掲示板を指さす)

この時期の音声言語は、まだ明瞭な発音にはなっていないが、身振りの大部分に音声に伴っており、2単位以上の構成要素から成る発話が可能となっている。2単位以上の発話では、「音声」+[身振り]、[身振り]+[身振り]が観察される。

上記の例では、自分が描いたアンパンマンの絵を教師に[描写的身振り]を伴った音声で説明しており、この[アンパンマン身振り]は、手遊び歌のアンパンマンの動作に由来するものと考えられる。他のクラスメートも同様の身振りを使用しており、クラス内、および保護者にも意味が共有されている[クラス共通エンブレム]と考えられる身振りである。これに続く音声を伴った[直示的身振り]によって、自分が描いた絵をどこに貼ってほしいかを、教師に依頼していると考えられる。

事例2：観察時期は4歳児クラスの6月。教師が紙芝居の読み聞かせをする場面。

T：「かみしばいをみる？ それとも新聞紙で(…)」

(紙芝居提示) (新聞紙提示)

C：「やだ 紙芝居 見たい」

[エンブレム](首を横に振る)

C：「Cは(自分の名前) 紙芝居 見たい」

この時期になると、身振りを伴わない音声言語のみの発話が散見されるようになる。発話の構成も3単位以上の発話が可能になってくるが、助詞の使用は見られない。また、使用身振りの中では、[メタ談話的エンブレム](喜多, 2002)である[うなずき]や[首、手の横振り]が応答に伴うようになってくる。

上記の例では、否定を表す部分にのみ身振りが伴い、他の部分は音声言語のみの三語発話となっており、助詞の使用も見られることから、1年前の観察事例1よりも音声言語の発達がさらに進展していることが伺える。

事例3：観察時期は4歳児クラスの11月。教師がクラスの幼児たちに、誰が今日の日直当番かを尋ねる場面。

C：「きょうは A(他の幼児の名前) お当番」

[ビート](人差し指を上下に振る) (幼児の写真

カード提示)

T:「えー どうして?」

C:「あのね 土曜日 お休みだった」

[描写的](手の平縦, 手の甲向け, 側頭位置で後方へ振る)

この時期になると, 助詞の使用, 間投詞の使用, 動詞の活用が見られるようになる。

上記の例では, 手の甲を聞き手に向けて, 側頭の位置から後方へ振る動きを伴う[描写的身振り]が見られるが, これは教師が使用する過去を表す手話由来の身振りであると考えられる。教師は過去の出来事を話す際に, 「まえに」という発話に伴ってこの身振りを使用することがあり, 対象児の他にも同型の身振りを「きのう」「まえ」等の過去を表す音声言語に伴わせる幼児がいる。対象児は, 月曜日の時点の日直当番に言及しており, 2日前の土曜日を意味する音声言語に過去を表す身振りを伴っていることから, この時点においてすでに, 曜日名称の順序性を理解しており, 時間の推移の概念が形成されていることが伺える。

事例4:観察時期は5歳児クラスの6月。登校直後, ホールで全校集会があることを知らせる校内放送が入り, クラスごとに廊下へ並んでホールへ移動する場面。

T:「あっ 放送だ」

C:「M先生の声 Cは ホールから 帰ってきたら
お話 する」

[描写的](指さし形, 手平下向き, 廊下から教室へ弧を描く) [描写的](右拳平外向き, 口の位置に構えて開く) [直示的](自分を指さす)

この時期になると, 発話の構成単位が増加し, 一語発話から多語発話への移行期に入っていることが伺える。しかし, 聞こえる幼児の先行研究結果とは異なり, 多語発話期に入っても身振りは消失しない。また, 聞こえる幼児の先行研究では, 一語発話から二語発話への移行期に観察されている身振りと言声言語の組み合わせが, 多語発話の中でも観察される。

上記の例では, 対象児が補聴器装用によって, 通常は聞き取りづらいとされている放送による話の内容, 話し手の声を聞き分けており, 上手に補聴器を活用できていることが伺える。また, 「ホールから 帰ってきたら」に伴う(下向き指さしを廊下から教室へ移動させる動き)は自分の空間移動経路のイメージを表現したものと考え

られる。次の「お話」に伴う(右拳平外向きから開く動き)の身振りは, 教師が使用している手話由来の身振りであると考えられる。最後の「する」に伴う自分への(指さし)は, 聞こえる幼児の一語発話から二語発話の移行期に観察される「音声言語」+[身振り]の組み合わせパターンで, 音声言語と身振りとが別の指示対象を表す「述語タイプ」(喜多, 1997)であると考えられる。

事例5:観察時期は5歳クラスの9月。教師が黒板に絵を描き, 運動会の種目「騎馬戦」について説明している場面。

C:「D(きょうだいの名前) まえ たたかったよ
ここの うしろに お友達の ここに のって
勝ったよー」

[描写的](両手平上で, 体中央に構える)

[直示的](両手平で自分の肩を触る)

[エンブレム](右手拳を突き上げ, ガッツポーズ)

T:「そう Dちゃんも 騎馬戦を やったことがあるの 帽子を とったら 勝ち」

[描写的](右手何かをつかむ動き)

この時期になると, クラスの他の幼児に自分の経験したことを話す場面では, 共通の経験をしていない相手に対して, 具体物を提示したり, 聞き手に分かりやすい身振りや発音サインを使用したりして, 話の内容を理解してもらうための配慮が見られるようになる。

上記の例では, 「ここの うしろに」の発話に(両手平上)で何かを支えるような[描写的身振り]が伴っており, 発話の意味との間にずれが生じているが, 次に続く発話「ここに のって」でそのずれを修正していると考えられる。このような発話と身振りとのずれが生じる現象については, McNeill(2000)の成長点理論や喜多(2000)の「分析的思考」と「からだ的思考」という視点から検討されており, 対象児が正に音声言語と身振り併用のコミュニケーションから音声言語優位のコミュニケーションへの過渡期にあることを考えると, 発話のもととなるイメージが, 音声言語と身振りという別々の表現様式へと成長していく際に現れるずれと考えることができる。

おわりに

聴覚障害児の身振りと言声言語使用のあり方を, 事例を元に検討した結果, 機能的には不明瞭な発音による音声言語の意味を身振りが補う例, メタ談話的な機能を有

する例、同一の指示対象の別の情報を表す例、音声言語発達の過渡期を示す例等、身振りと音声言語とは様々な機能を担って使用されていることが示唆され、聴覚障害児の豊かなコミュニケーションの一側面を伺い知ることができる。

註

- (1) 観察初期の対象児のコミュニケーションには、音声や身振りのみ、不明瞭な発音のために音声言語として聞き取れないものも含まれるが、ここでは全て発話と表記する。

引用文献

- Acredolo,L.P. and Goodwyn,S.W. (1988) Symbolic Gesturing in Normal Infants. *Child Development* 59, 450-466.
- Bates,E., Thal,D., Whitesell,K., Fenson,L., and Oakes,L. (1989) Integrating Language and Gesture in Infancy. *Developmental Psychology* 25(6), 1004-1019.
- Capirci,O., Iverson,J.M., Pizzuto,E., and Volterra,V. (1996) Gestures and words during the transition to two-word speech. *Journal of Child Language* 23, 645-673.
- de Villiers,J., Bibeau,L., Ramos,E., and Gatty,J. (1993) Gestural communication in oral deaf mother-child pairs : Language with a helping hand? *Applied Psycholinguistics* 14, 319-347.
- Goldin-Meadow,S. and Morford,M. (1985) Gesture in Early Child Language : Studies of Deaf and Hearing Children. *Merrill-Palmer Quarterly* 31(2), 145-176.
- 秦野悦子(1983)指さし行動の発達の意義. *教育心理学研究* 31(3), 145-176.
- 秦野悦子(1984)前発話期から発話期における否定表現の展開. *教育心理学研究* 32(3),255-264.
- 喜多壮太郎(1997)身振りとはことば. 小林晴美・佐々木正人(編)子どもたちの言語獲得. 大修館書店, pp.68-84., pp. 110-114.
- 喜多壮太郎(2002)ジェスチャー 考えるからだ. 金子書房. pp.11-49.
- Robinshaw,H.M. (1996) The Pattern of Development from Non-communicative Behavior to Language by Hearing Impaired and Hearing Infants. *Early Child Development and Care* 120, 67-93.
- 斉藤こずゑ・武井澄江・荻野美佐子・大浜幾久子・辰野俊子(1981)生後2年間の伝達行動の発達—母子相互作用における発声行動の分析. *教育心理学研究* 29(1), 20-29.
- 山田洋子・中西由里(1983)乳児の指さしの発達. *児童青年精神医学とその近接領域* 24(4), 239-259.